

書 評

筒井一伸編：『田園回帰がひらく新しい都市農山村関係』ナカニシヤ出版，2021年3月刊，229p，3,300円（税別）

本書は「田園回帰」という潮流のなか農山村地域で進められる地域づくりの原動力を探り，今後の地域づくりを読み解くための理論的枠組みを，地理学および「地域」関連諸分野へ提示することを目的としている。タイトルにもある「田園回帰」という語は，一見すると地理学用語にもみえるが政策立案のなかで使用され始めたものである。狭義の都市部から農村部への人口移動に加えて，都市住民の農村部への関心の高まりをも含むものである。地方創生事業を後押しに「田園回帰」にまつわる諸政策・施策の実施は，ローカルな地域の変容をもたらしうる営力ともなっている。人文地理学者のできることとして，こうした営力の丁寧なトレースが真っ先に思い浮かぶが，本書は，とくに二つの観点で，「もう一歩先」を目指している。一つ目は地域にまつわる学問が現実的課題にどのように対峙し，その解決にいかに関与するかという実践に関わる点である。二つ目は，「田園回帰」にまつわる諸政策・施策，もしくは地域づくりに関する諸現象を地理学的に読み解くための調査報告の先にある視点の提示である。こうした二つの「もう一歩先」が以下の章構成で論じられている。

- 序 「田園回帰」への視角－ガイダンス（筒井一伸）
- 01 田園回帰時代の農山村（筒井一伸）
- 02 三重県における人口変化の空間的プロセスと田園回帰（山神達也）
- 03 和歌山県下旧市町村の将来人口推計と田園

回帰（山神達也）

- 04 移住支援のモノグラフ－NPO・県・市の現場から（高和雄・重見昌利）
- 05 移住者受け入れによる住まいのつなぎ方－空き家再生と地域社会の受け入れ体制（佐久間康富）
- 06 移住者受け入れとなりわいづくり－地域企業と継業（筒井一伸）
- 07 農村空間の商品化からコモンの再創造への「田園回帰」（中川秀一）
- 08 社会連帯経済と「田園回帰」との接点を探る（立見淳哉）
- 09 田園回帰とネオ内発的発展論（筒井一伸・立見淳哉・佐久間康富）

執筆者の陣容は，農村地理学者から経済地理学者，地域計画を専門とするエンジニア（もしくは工学者）と多様である。

内容を簡単に紹介すると，「序」では，まず「田園回帰」という言葉が作られた社会的背景が示される。そして，これまでの数的な増加に矮小化した視点ではなく，「どんな人」が農山村へ移住したのかといった拡張された視座が説かれている。

「01」では，「序」で示される視座から，今日の田園回帰の概況を示したうえで，これまでの研究動向を整理して，都市農村関係論的田園回帰に迫るための論点が示される。

「02」では三重県，「03」では和歌山県を事例に，平成の大合併前の旧市町村を分析単位とした人口動態が検討されている。「03」の最後に指摘されている，将来的にも人口が減少し続けるなかで限りある移住者の獲得をめぐる地域間競争が激化するという危惧は，地域課題とその対策を迫認という研究姿勢の限界性を示唆している。

「04」の筆頭著者はNPO法人ふるさと回帰支援センター副事務局長を務めている。移住をめぐる実践のあり方そのものが示されている。著者自身が移住の相談を受けるなかで感じることとして、移住者が「どういう暮らしができるのか」という相談を金銭的な支援策より最初にするという記述は興味深い。移住者を人口的観点のみで説明しきれない現状をよく表している。

「05」は地域計画を専門とするエンジニアによる同じく応用研究となっている。空き家を媒介にした地域内外の人々に新たな関係を構築していく事例が示されている。空き家の利活用は地理学でも研究として取り組まれ、「調べること」は本章と共通するものの着地点は異なるのがよくわかる。

「06」は編者による最もボリュームのある章である。編者の移住希望者への対応した経験から得られた「地域起業」と「継業」による「なりわいづくり」の実践について論じられている。大型店へ顧客が奪われて農山村の商店が廃業するという一見、受容してしまいがちな説明である。しかし、こうした決定論的語りへの違和感から、後継者不足という地域調査で得られた経験から着想した実践的提案は、基礎研究と応用研究を架ける見本の一つであろう。

「07」は、農村空間の商品化について英語圏での適用法を丁寧に定位しながら、全てのモノが財やサービスとの交換可能な商品とされる情勢に抗する「コモ化」という概念をキーに田園回帰を見通す枠組みを提示している。「農村空間の商品化がもたらす経済効果のような皮相的な追求 (P176)」という批判は興味深い。農村空間で生じる諸現象に対して **Merchandising** と **Commodification** を混用して迫ろうとする流れに警鐘をならしている。

「08」では、2000年代のフランスで活発化した

社会連帯経済の理論と実践の紹介を通じて、日本の田園回帰現象との接点を探っている。本章は方法的検討で少し構えてしまうかもしれないが、農山漁村のフィールドワーカーなら自身で見聞したモノやコトに置換して容易に理解できる内容となっている。現代の農山漁村を対象にした地理学的研究を進める際に求められる視点の一つであろう。

「09」はまとめとして、ネオ内発的發展論を概観し、これまでの社会連帯経済の議論などをふりかえりながら、コミュニティベースの地域づくりの可能性に展望していると締めくくられる。

本書を通じて「移住を人口ではなく地域の担い手 (P98)」として捉える視点は、人文地理学の可能性を広げてくれる。財政上の助けになる移住人口だけでなく、移住者の属性に注目して読み解くと、地域の特徴を異なった側面から説明できるだろう。

これまで「田園回帰」ないし農山村移住をテーマとする地理学的研究で、説明対象とすべき「地表面の諸現象」は「たくさんの人が移住した結果」に限定されがちであった。本書を読む限り、「数の多寡」によって地理学の説明対象となりうる「地表面の諸現象」を選別していくことは、地理学、とくに人文地理学の学問的魅力を矮小化しているように思える。もともと人口密度の低い農山漁村地域で起こる「地表面の諸現象」は、都市部に比べて圧倒的に少ない人数で引き起こされるし、1人の人間の地域社会に果たす役割の多様性や重要性は都市部に比べて高い。

こうした観点から考えると、本書の提示するような「人口多寡」ではなく、個人の動きや役割に立脚した「田園回帰」への展望は、諸現象を読み解く視座を拡大させるものとなろう。これまでゼミで研究テーマを発表して「(移住者数をもとに) 成功例かどうか」という質問に窮した初学者や院生も少なくないだろう。確かに、農村部から大都

市圏，都市中心部から郊外というという人口移動の流れを研究テーマとする場合は，「数の多寡」を指標に研究対象としての妥当性を判断するだろう。しかし，農山漁村で生じる人口流入を取り上げる際に，都市部への，もしくは都市圏内での人口移動と同じような指標で研究対象としての妥当性は判断しにくいと思われる。

本書はこうした類の素朴な疑問に応えるヒントが隠されている。「人数が少なくたって確実に地域が変わる空気はあるのに」と憤慨した方にとってはうってつけの本であるし，ついつい「数の多寡」を質問したくなる教員にとっては，質問の投げ方の球種を広げてくれる一冊となろう。

また，読了後の素直な感想として，評者はフィールドでお世話になっている方々に向けた社会貢献を一切してこなかったことを痛感した。誤解を恐れずにいうと，第二次世界大戦後の日本の地理学界は政策や実践から距離をおいて展開してきた。今日の地域課題を地域で生じた「病」になぞらえると，地理学は「病」の「診断」に特化してきた。一方，昨今の情勢から，国立大の地理学教室は文字通り縮小の逆風に晒され各地の大学で地域の課題解決，課題という「病」の「治療」に向けた学際的・複合領域的な地域系学部が多数設置されるなかに地理学者も加わり，何とか地理学に関する科目を維持することも多々ある。評者も「診断」能力しか磨いてこなかったので「治療」の術を持ち合わせていない。地域側からいざ「治療」を求められると右往左往する始末である。「なんとか力になりたい」と思うものの，何もできないのである。戦後の地理学の歩みを鑑みると『「診断」はなんとかできるが，『治療』はちょっとできない』という地理学者は少なくないと思われる。

こうしたなか編者の筒井氏は「診断」も「治療」もできる稀有な地理学者であろう。多様なバックグラウンドかつ基礎研究から応用研究にわたる執

筆陣の多様な論考をまとめあげられたのは編者だからこそ可能になったと思われるが，多くの地理学者にとっても今後求められる能力の一つかもしれない。

(吉田国光)

黒沼善博著：『地下ダムと島の環境経済学』古今書院，2021年3月刊，201p，3,600円（税別）

本書は大規模インフラ建設を得意とする大手ゼネコンの社員による，地下ダムと島に関する著作である。「はじめに」によると，著者は沖縄県宮古島の地下ダム建設工事に1991年以来従事した。日本の地下ダム施工の第一人者といってよい。

地下ダムは表流水を貯留する一般のダムとは異なり，地中に止水壁を築造し，地下水を貯留する。そのため，降水が多くとも表流水に乏しい離島においては，きわめて有用な水源確保の手法である。本書は地下ダムそのものの効用にとどまらず，離島の環境やその保全にまで論及している。

本書の構成を以下に示す。

第1編 地下ダムと島の地下水

- 第1章 地下ダムとは何か
- 第2章 島嶼圏の地下ダム
- 第3章 淡水レンズの島
- 第4章 島の建設現場

第2編 経済学で考える島の地下水

- 第1章 地下水の効用理論
- 第2章 建設技術の複合と総効用
- 第3章 島嶼圏の全体最適
- 第4章 建設技術の応用

第3編 地下ダム技術と環境技術

- 第1章 地下水保全から始まった資源再生
- 第2章 島嶼を活かす環境技術
- 第3章 地下ダムの持続可能性
- 第4章 地下ダムから展望する未来